

ためには、どんな方法がよいかと考えると思わず、身ぶるいが止まらなかった。

二台の大車に幼児と老人、妊婦を乗せ団員とその家族あわせて四百六人は、匪賊の襲撃に脅えながら東陽開拓団に着いた。東陽開拓地は一度も匪賊の襲撃を受けたこともなく、ソ連兵の進攻もなかった。着のみのままで食糧もない私たちに村田勝東陽開拓団長らは、心からのもてなしをしてくれた。

しかし、着替えがない、フトンも毛布もない。食糧も欠乏するという毎日で、すすのおカユもなかった。団員と家族は栄養失調や発疹チフス、それに猛烈に繁殖するシラミの三方から攻められ顔は青白く、頬はこけていった。痩せ細った手を差しのべて「日本へ帰りたい。死にたくない。」と涙ぐみながら、かすかな声で訴えながら死ぬ人が、十二月から二十一年二月にかけ、厳しい零下四十度の寒さも手伝って、毎日のように死者が出た。

念願の帰国命令を受けたときは、東陽開拓団に亡命したときの四百六人が二百人に減り、二百六人が夢にまでみた故国の土を踏むことができなかった。私たちは江北

四十一大隊として二千四百余人が一同となりチチハルから引揚げ列車に乗り、十一月三日に佐世保に上陸できた。東陽開拓団に亡命したのが帰国を可能にしたわけで、心から感謝申し上げます。

私たちは敗戦国の棄民集団だったことをいやというほど思い知らされました。改めて戦争の大きな歯車が、いかに犠牲を強いるか、私たちは忘れない。

こんな悲劇は二度と繰り返すべきではないと心から訴えたい。

二百六人のご冥福を祈りながら。

北満の痛恨

兵庫県 門田 幸次郎

満鉄のハルピン駅から、浜北線北安行きの急行列車が、はるかな地平線を目指して、広漠果てしない平原を走る。こと七時間ばかりのところに、波にただよう粟粒のような「綏稜」という小駅があった。

わら苳の出店二軒と、数個の倉庫だけのこの駅で降り、徒歩で北上すること二キロのところに、土壁で四囲を守られた部落人口二千人の北安省綏稜街があり、綏稜県公署の所在地であった。柳の枝を組み合わせ、それに泥を塗っただけの現住満系の家屋が道路の両側に建ち並び、ところどころに開拓団弁事務所の標識や、日系商店の看板があった。その道を左に折れて少し行くと県公署が見え、満州国旗と並んで日の丸がはためき、日系官吏も二十余人執務して、開拓県らしい活況を呈していた。ここは北満屈指の開拓県で、第三次の式装移民団である「瑞穂村」開拓団をはじめ、第十二次「布施」開拓団、第十三次「大神戸」開拓団に至る十二個の開拓団が、県北西部の奥地に散在し、総人口はすでに五千人をこえていた。

しかし、交通の便は極めて悪く、県公署から至近の開拓団までが四十キロ、遠方の三栄義勇隊開拓団まで百キロの間に、定期的交通機関は何一つ無く、申し訳程度に一本の道路で結んであるだけだった。この道路も降雨の際は泥濘と化し、数日間は一馬の往来も不可能となっ

た。

不便の打開策として、瑞穂、王榮、黒馬、諾敏河の開拓団は綏稜街に「弁事務所」という小屋を設け、県公署との中継連絡、郵便物や物資の集配、団員の宿泊などに当たらせるとともに、一日一往復程度の太車（ゴムタイヤ付き二輪の馬車）をその開拓団まで運用していたが、他の開拓団にはまだ弁事務所もなく、特に最後の入植となった大神戸開拓団（兵庫県出身者）などはきびしい試練と不便な生活に絶えかねて、退団者も出るという始末であった。

国策に従って海を渡り、万里の大陸の奥に送られ、安住の地を創設しようと、必死の鍬を振るう人たちの胸にも、耐え難い生活の不安があった。

ともあれ、本県の人口七万人、面積兵庫県の二倍、県北部の原始林は、ソ連との国境に至る、広大で肥沃な未墾の原野は、時に匪賊襲来の危険はあったにしても開拓民の夢を支える唯一のものであった。

未来への希望のみが、辛うじて心の平和を維持していたといえよう。

第三次の瑞穂村開拓団（長野、茨城、福島、宮城、山梨、山形、新潟、高知、熊本県出身者）は、当初、数次に亘る匪襲を受け、数十人の団員を失ったが、辛苦に耐えて広大な水田の開発に成功し、白米出荷のほかに、協同組合で造る清酒「みずほ」の生産地として知られ、第六次黒馬劉開拓団（四国各県出身）は蜂蜜の出荷、第七次王栄廟開拓団（香川県出身）は酪農によりバター、牛乳を生産出荷して有名となり、生活も安定していたので、後発開拓団の希望をつなぐところとなっていた。

原住民と開拓団との関係は、表面、民族協和の建国精神で安定しているかに見えたが、昭和十八年第十三次大神戸開拓団入植準備の際、政府の緊急対策で、原住民の家屋と耕地を強制的に買収し、ここに開拓団を入れたことにより不満の声が目立つようになっていた。（それまでは、政府が家屋を新設して導入し、原野を開発していた。戦後、この開拓団が最初に大規模な襲撃を受けた悲惨な殉難はここに原因があるものと思われる。）

敗戦という未曾有の精神的虚脱状態の中では、日系指導者達も為す術を知らず、戦勝者と称する原住民のあり

とあらゆる老獪な迫害に耐えているうちに、指導的立場にあった者は、ソ連兵に拉致されて捕虜となり、残った男子は強制労働か監禁かという有様であった。

このころ、県下開拓団の消息は全く不明であったから、連絡のため決死隊三組（六人）が選出されて、三方面へ潜行したが、大神戸開拓団へ向った桜井（元、警尉）伊藤（元、産業股長）の一组は途上で惨殺され上田組は瑞穂村に到着したとき、老幼婦女の集団自殺という凄惨な事件に巻き込まれて帰投せず、大島、門田の組だけが、諾敏河開拓団の炎上と匪襲、黒馬劉開拓団は毎夜匪襲を受けてはいるが、被害は十人余との連絡を遂げて、辛くも生還するという急迫状態であった。

十月十七日、ソ連兵から「一時間以内に全員貨車に乗れ」と指示されて、着のみ着のまま、綏稜街を追い出された私達は、わずかな手荷物を気にしながら、思い出の城門をふり返る余裕もなく、あの二キロの道を逃げるように歩いて、無蓋貨車に積み込まれたのだった。奥地に残っている開拓団のことを思うと胸のつぶれる痛みがあったが、そのとき、私達の生命も風前の灯であり、施す術

は全く無かったのである。

貨車はすぐ発車したが、次の緩化駅で長時間停車しもと警務関係者全員と、糸賀校長などが指名されて、ソ連兵に拉致され、それが永別の時となった。残る男子の数はわずか五人となり、総員は九十余人に減少していた。

すでに夜の気温は零下十度であった。無蓋貨車の中で、寒気と飢餓のために、先ず幼児数人が倒れた。

緩後発車から四日目の十月二十一日、私たちを乗せた貨車は、ようやく新京駅に着いた。駅から難民収容所までの街路は、見物の満人の群れで一ぱいであった。貨車到着ごとに、哀れな姿の引揚者に浴びせる罵声や冷笑の中を、私たちは屈辱に耐えて、ただ黙々と歩いた。前列を行く開拓団員の中には、一人の子供も見当らず、丸坊主の女性らしい者ばかりが「むしろ」を背負っていたが、私たちの列には子供も多かったのだ、「子供を売れ」「子供はみんな死んでいる。早く決心せよ」という声が執ように追いかけて来た。強奪されそうになって、それを阻止しようとする母親の叫びが続いていた。

やっこの思いで、仮収容所となっていた室町小学校に

着いたものの、そこには何の設備もなく、栄養失調と肺炎をこじらせた子供たちは生気を失い、発熱する大人たちも増加して行った。

その頃、新京の夜の気温は零下十度位にもなり、凍りついた糞尿が小山のように盛り上がった便所は、到底使用することができなかった。やむを得ず校庭に出ると、小さな土まんじゅうが盛られていて、足の踏み場もなかった。そこは、先着の避難者たちが埋めた、子供等の墓場だった。

校庭の物置には、大人の死体が積み重ねてあったが天然の冷凍によって、まるで枯木の山のようにであった。この収容所だけで、毎日数十人の死亡者があり、その死体は、翌朝、材木のように大車に積まれ、死体の上に荒縄を通しただけの哀れさで、通行人に死顔を見せながら、新京の大通りを運ばれていった。郊外の見渡す限り黒々と死体が積まれただけの墓場には、野犬が群がって肉を食い、カラスの大群が飛び立っていた。

この冬の、新京での日本人の死亡数は、およそ二十万人と伝えられた。

この収容所の棚の外には、多数の中国人が群れていた。やじ馬心理が主のようであったが、子供を貰い受けようとする婦人も多く、棚の外から、しきりに私どもに呼びかけていた。

頼るべき夫も、所持金も無く、前途に絶望した母親が、も早これまでと決意したのであろうか、同胞の目を避けながら、小さな生命を中国人に託しているのを目撃した時ほど、心の痛む時はなかった。

数日ののち、私どもは「日僑収容所」に移る者と、新京市内で宿所を探す者とに分かれた。収容所は「緑園」という関東軍宿舍あとで、若干の給食はあったが夜間は婦女がソ連兵に狙われる危険があり、発疹チフスが蔓延していた。独自で宿舍を探せば、たちまち、飢餓に襲われるのは必定であった。

何れにしても、生きて祖国に帰れる保証は全くなかった。引揚げがいつ開始されるのか、見当もつかなかった。そして、それまでいかにして生き延びるかが問題であった。これからの生活を思うと、誰の胸も暗黒で、この時ほど、祖国と大陸とを隔てている海がうらめしく思えた

ことはない。

この時から、その日のパンを得るための苦闘が始まり、翌年九月末までの地獄絵が展開したのだった。

河野もと開拓科長をはじめ、発疹チフスで倒れる大人たちに続いて、生き残っていた子供のほとんどが死亡した。家族のために必死にパンを求めていた私たちは、いわゆる「男狩り」に捕えられて、無報酬の重労働を強制されることが多く、唇をかむ屈辱は、なお長期間に及んだのである。生きのびて引揚げの日を迎えたのが奇跡だったと思うほかはない。

私たちの後に、収容所にたどり着いた開拓団員たちは、さらに悲惨であった。綏稜県瑞穗村や大神戸開拓団の悲劇はここで伝えられた。黒馬劉開拓団の一部だけは裸同様で引揚げて来たが、他の団の引揚げが伝えられなかったのは、全団員が滅亡したのであろうか。痛恨極まない北満の野である。

空前の悲劇の渦に巻き込まれた私どもは、いつ、どこで、どのような別れ方をしたのかも思い出せない位である。また、引揚者の終結地「コロ島」で、写真や文書は

メモ類に至るまで、すべて取り上げられたこともあって、引揚げ後のお互いの消息は全く不明のまま空白の二十六年が過ぎて行った。

ところがその年末、山崎伝忠氏が自宅の物置を整理中、敗戦直前作成の綏後街居住者メモ（日系全員の本籍地記入のもの）を引揚げ当時の被服の中から発見し、門田に送付したので、それを資料として調査した結果、約四十人の生存者を確認することができた。そこで綏後会準備会を結成し、文書で連絡の結果、昭和四十七年十一月第一回綏後会を兵庫県民会館で開催することとし、東京以西の会員十七人が、今浦島の劇的な会合を行った。その後、第二回は京都で、第三回は熊本で年一回の会合を持ち、往時を偲び、生き残った者の為すべきことを話し合っている。

私たちは、この会合の輪を開拓団員にまで押しひろげたいと思う。敗戦直後、綏後県下で殉難した日本人の氏名とその死亡状況、引揚げに至るまでの受難の模様を調査し、正確な記録を作って、無残に散った数千の霊に手向けたい。また、現地を踏査し、遺骨を収集して殉難の

碑を建てて、その霊を弔いたいと思う。あわせて、現地に残されたという幼児の運命を尋ね、現地人妻として生きているであろう悲運の人々にも、救助の手を差しのべたいと願うものである。

思うに、北満開拓団をはじめ、北満居住者の言語に絶する悲惨な受難は、満州事変以来武力によって侵略し、圧迫し、殺戮した日本軍およびその国家に対する原住民の復讐心が、身近に存在する弱者に対して、集中的に爆発したことにあつたろう。頼るべき男子は、根こそぎ動員により出征し、老人婦女子だけの無防備に加え、敗戦虚脱心理の集団は、抵抗の術さえ知らなかった。ただ、日本人というだけの理由で、死の十字架を背負わされ、残酷な死骸となって、北満の広野にさらされたのは幾十万人か。血みどろの逃避のあと、無蓋貨車の上で力尽きて、沿線の露となった人もあり、やっとの思いで新京に辿り着いた者も、待ち受けていた伝染病のために、全滅状態となってしまった。

私たちは、復讐の犠牲者として火中に投ぜられ、この悲惨な受難の中から、万死に一生を得たのだった。

いまでも北満の地平線には、号泣の幽鬼は青く燃え、遺骨は星のごとく雑草に埋もれているであろう。さらに掠奪された婦女子、買われていった幼児等は、いま東北の空でいかに生き、いかなる運命を迎えているであろうか。

民族を代表して、血の償いを強制された旧北満の悲劇は、戦後三十年の、今日になっても、まだ続いているのである。

私たちの思い出の中には、危急の際、友愛の手を差しのべ、引揚者たちを救った中国人も多数ある。これらの記憶も、感謝の念で記録され、新しい交友親善のきずなとなることを祈念するものである。

積み残された三百五十人の遭難

——破損と漂流の末、支那海近くまで——

岩手県 田中 弘

二十三日、乗船初日の当時からちょっと動揺していた中共軍は、私が二十四日の引き揚げ事務が完了して中央

区分会の岡崎周治氏と連盟本部事務所に書類や印鑑類を返納に行った時には、ちょうど終戦の大詔が放送された日の夕日のような変に息苦しい空気であり、なにか非常に恐れているような感じでした。

岡崎氏に新任の連盟最高幹部（鎮江區か鎮安區の連盟員で、汽車で引き揚げる人々の収容所で日僑管理課長の通訳をしていた者。）に紹介せられ、残留日本人の管理員として努力するむねを約束して一足先にそこを出たのですが、岡崎氏とは後で元第一街の世話役だった光永氏（当時、私の街に居住）と最後のお別れ会をすることにしていた。そこで、一応街公所に寄ってみましたところ、机も椅子も皆どこかに運び去られてガランとしているので、すっかり驚いてしまいました。その時、文書（ウォンスウ・中国の事務員）をしていた董（トウ）先生が外から帰ってきて、「田中、大変だ。俺たちは八路军に街長はじめ基幹隊長も皆寛甸につれていかれる。」と言われ、事態が最悪の極点にきているなと思いました。帰宅して岡崎氏を待っていると、彼は息を切らせてやってきました。そして、戦況は中共にまったく不利であり、